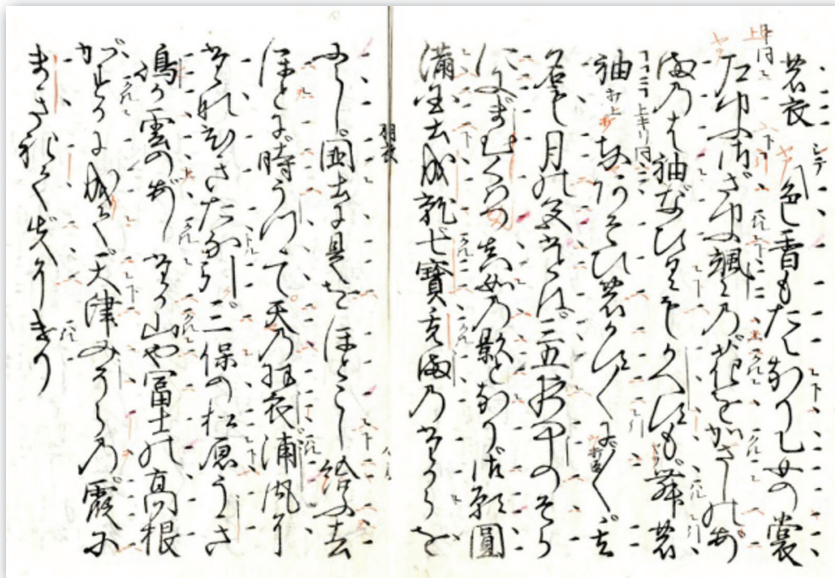
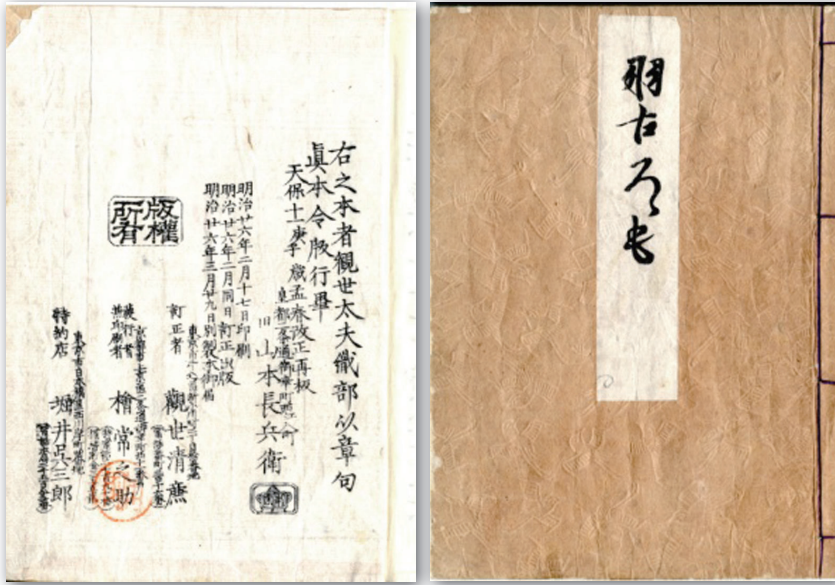


一―四、羽衣の謡本の歴史―明治以降の羽衣の謡本

本稿では、羽衣のキリを例としながら、明治以降の謡本の特徴と進化について、説明していく。

一・ 檜常之助（特約店 堀井呉三郎） 明治二六年

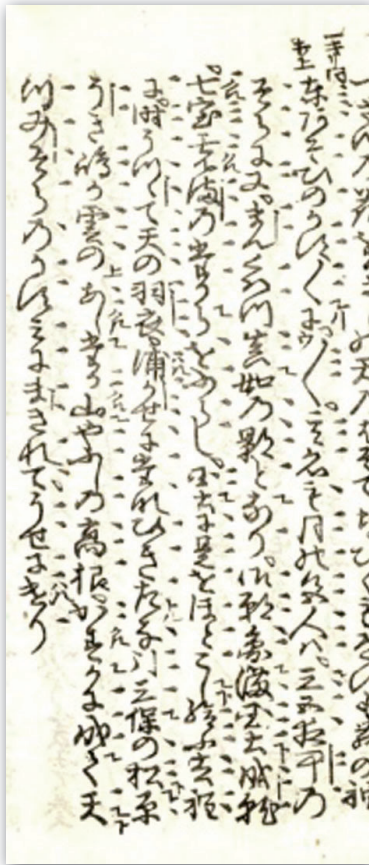


上野 正章

天保一一年版の再版で、和本の形態を取り、千鳥模様打抜き薄茶色の表紙に長形題簽をあしらう。直シは「同」、「上」、「下」、「ハル」、「クル」、「打返」、「打上」、「トル」、「ハシリ」、「キリ」、「句切点」が印刷されていて、これが朱書きで補われている。補筆は丁寧で、ゴマ点が全面的に修正され、打切の「ウ」や「ヲ」、「ハシリ」、「引き節」が書き込まれている。紅色による訂正も認められる。現行の大成版と比べると浮キの数がはるかに少ない。口伝の領域だったことがうかがえる。多くの印刷譜への加筆修正から、印刷譜に対する口伝の優先を指摘することができる。

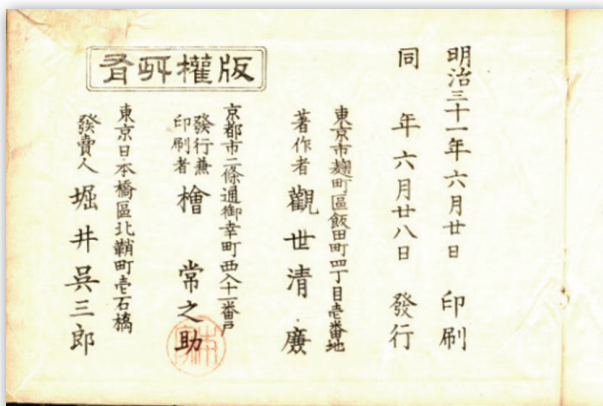
奥付には、訂正者観世清廉、発行者兼印刷者檜常之助、特約店堀井呉三郎の名前がある。かつての版元山本長兵衛の名前も記されているが、頭に「旧」が付されている。著作権移譲と、分業体制による出版活動を読み取ることができる。

二、『明治新版謡内百拾番 全』 檜常之助（発売人） 堀井呉三郎 明治三十一年



携帯用謡本。二〇五グラム。『明治新版 謡外別能九拾番全 新謡乱曲附』とセットで全番組を網羅し、本書は、タイトルの通り、現行の内組に等しい内組一〇曲が収められている。コンディションは驚くほど良好で、書き込みは無い。コレクションのために購入されたのかもしれない。

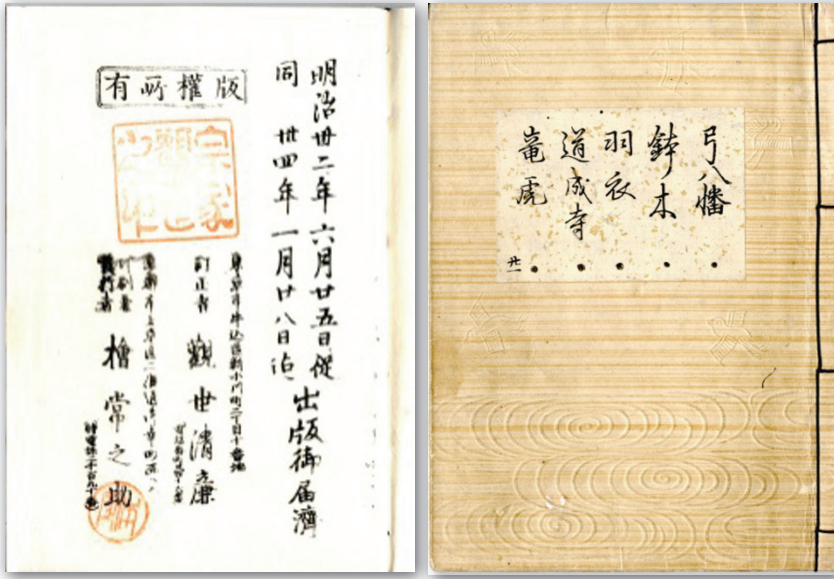
詞章に付された指示や記号は明治二六年版にほぼ共通し、「同」、「上」、「クル」、「下」、「ハル」、「キリ」、「打上」、「トル」、「ハシリ」、「句切点」に打切の「ウ」が加わる。ただし、先述の明治二六年版と字体は異なる。画数の多い漢字の仮名書きや、簡略化した字体への置き換えも見られる。おそらく縮小印刷を念頭に置いてのことだろう。



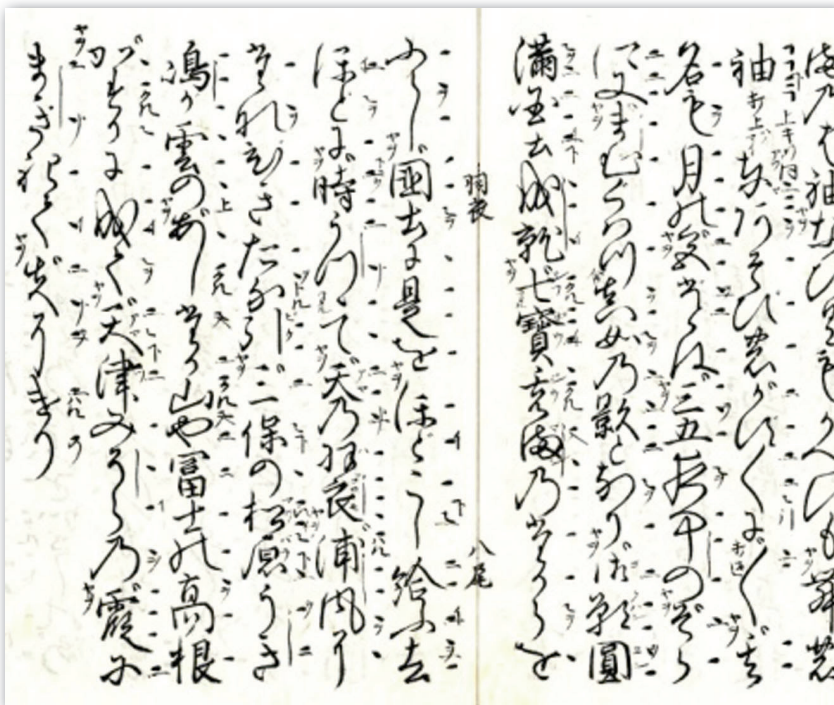
三、檜常之助 明治三二〜三四年 初版

和装、丁子引の表紙、横型題簽の粋な装丁の謡本。檜書店による初めて直シを十全に印刷した画期的な謡本として知られる。従来、謡本の直シは覚え書き程度に印刷し、稽古の過程で師匠が朱で補うものとされていた。

観世清廉による直シや説明は詳しい。「同」、「上」、「下」、「ハル」、「クル」、「ヲ」、「入」、「ウ」、「下ニウ」、「イ」、「ア」、「含」、「ツメル」、



「トル」、「打返」、「打上」、「ヤヲ」、「ハシリ」、「引キ節」、「キリ」、「句切点」が印刷されている。漢字の読み方も丁寧に記されている。相当使い古された観があるものの、謡本への書き込みは非常に少ない。「国土にこれを」のあとの「。」が胡粉で消され、「ほどこし」の「し」に引キ節が加えられている程度である。だいたいの例外なく印刷された記号に従って稽古し、謡ったと考えられる。なお、弱吟における「下ニウ」の謡い方は不明。



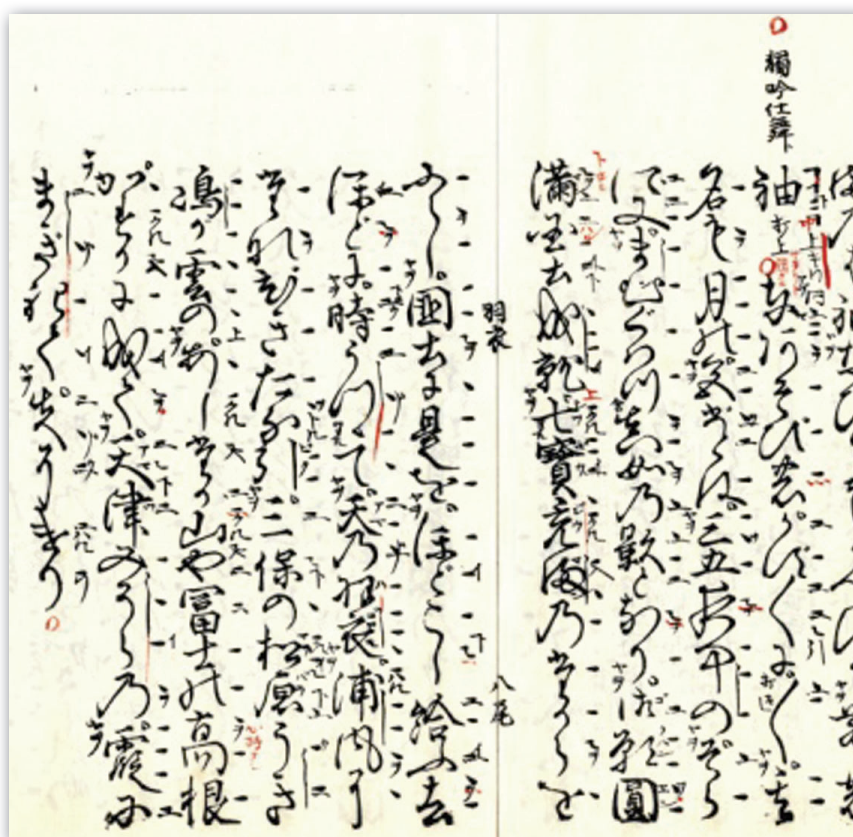
四、檜常之助 明治三二〜三四年 第二版 明治四〇年〜四二年

檜書店による最初の直シ入り謡本の第二版。木版印刷によるものだろう、版面の文字が初版に比べて全体に心持ち太くなっている。

再版に際しての直シや解説の修正・削除は無い。ただし、いくらか使用者による朱の直シがある。まず、四行目「国土成就七宝」の「国土成就」と「七宝」の間に「上」が補われ、「七宝」から上音の音域



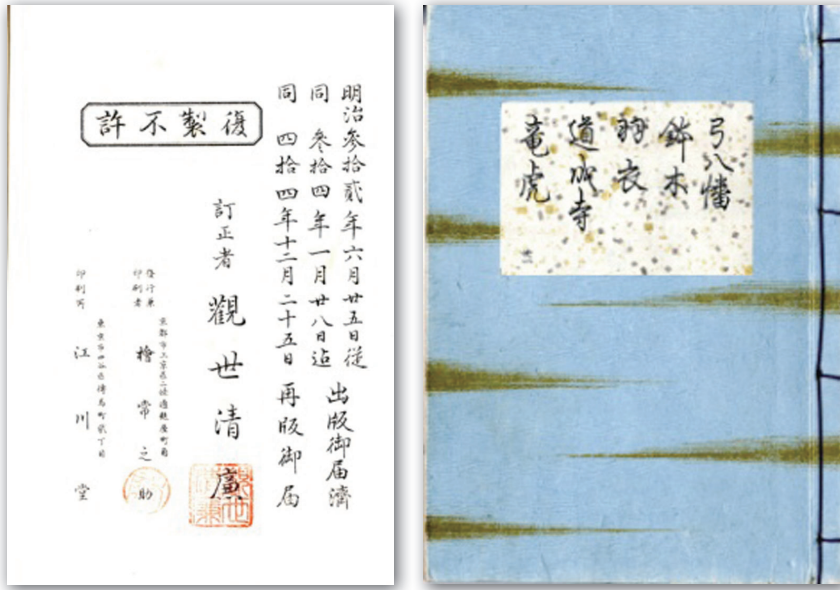
になることが示される。「下中二」や「ヲ」の記入によって中ウキが明確になる。「サラリト朗カニ」という表情を示す書き込みもあり、引キ節も追加されている。楽譜を土台に自分の受け継いだ謡い方を書き入れるという昔と変わらない師匠の指導を見て取ることが出来る。あるいは、後続の増刷や大正版、昭和版を見て書き込んだという可能性も考えられる。なお、「かすかに成て」の「か」の「入」は、墨で加筆されている。



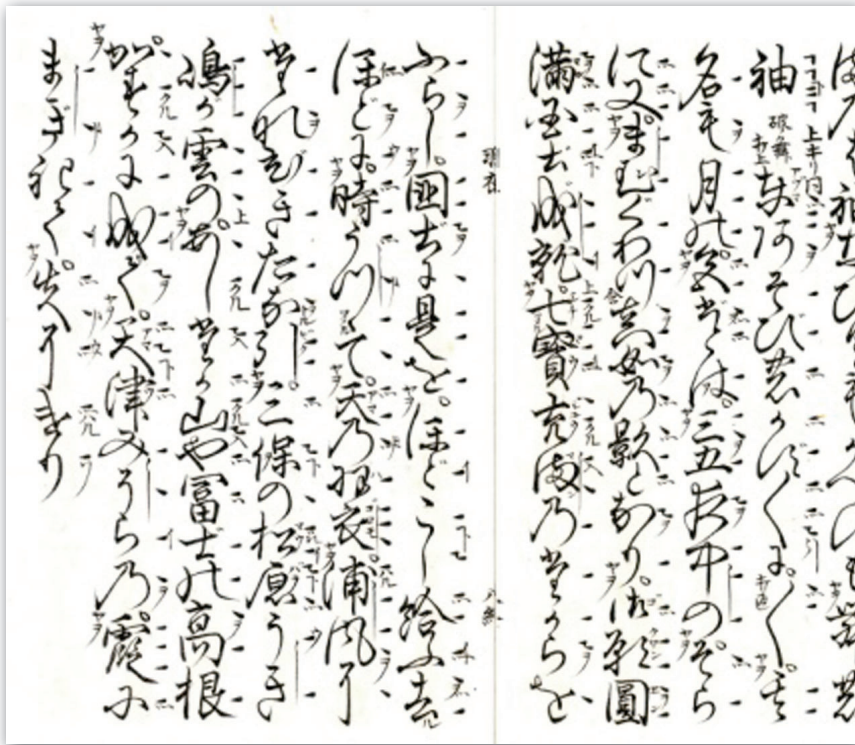
五. 檜常之助 明治三二〜三四年 再版(第三版以降) 明治四四年

版と刷の区分が曖昧だが、第二版の後なので、第三版以降である。装丁が変化し、水色の表紙に金銀振り和紙の横型題簽をあしらう。

詞章の章句や字体は、濁点の加筆修正が認められるものの、初版を踏襲する。他方、印刷された直シは初版と異なる筆致で改稿されている。いくらか修正もあり、「東あそびの」の「の」に引キ節が加筆さ

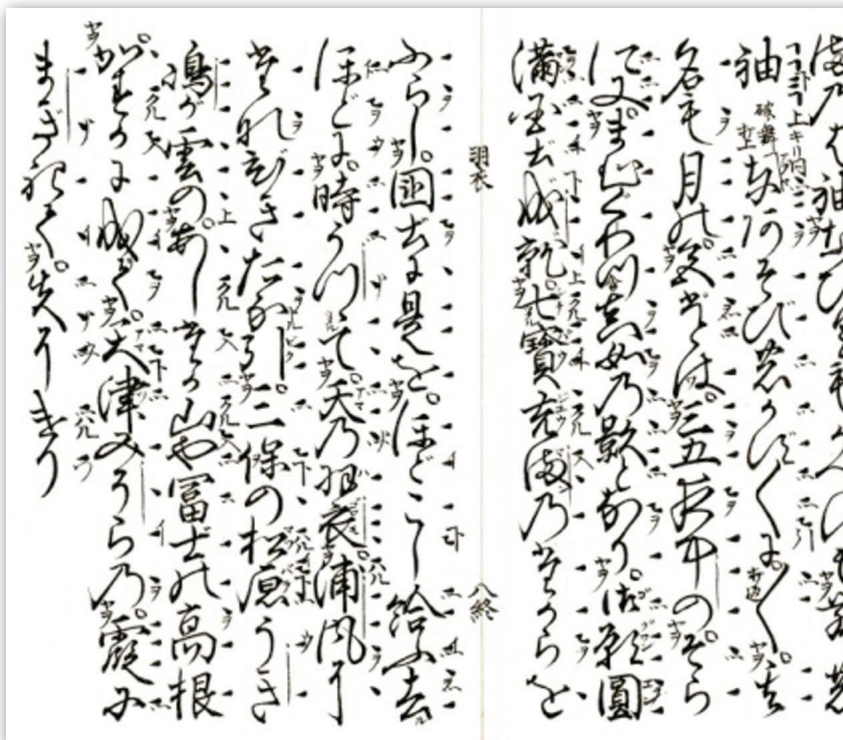
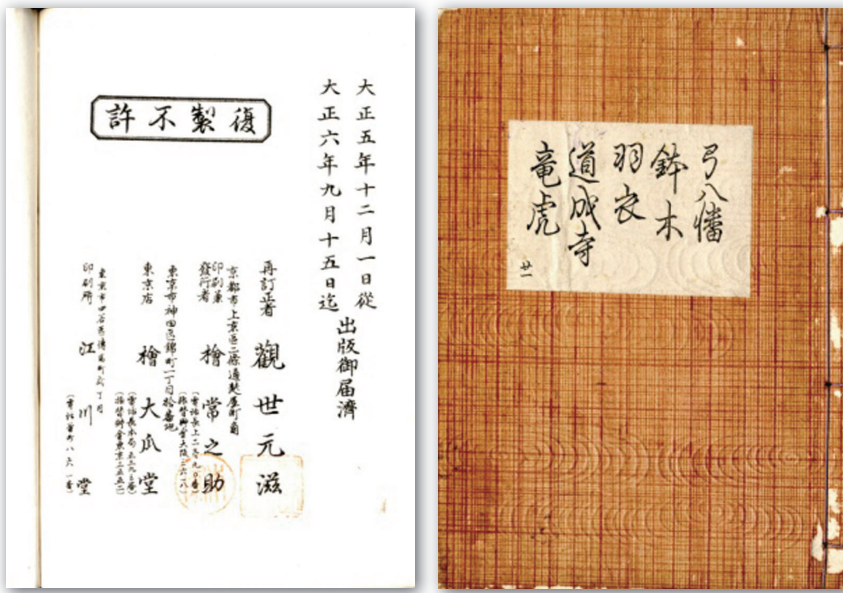


れ、「七宝充満」の冒頭に「上」が加わる。逆に「うき鳥」の「き」、「霞にまぎれて」の「ま」に付された引キ節は削除される。また「かすかに成て」の「クル」のあとの「に」には「入」が書き添えられている。とりわけ大きな変化は、「時」に付された「下ニウ」の削除と、直前の「に」への「ウ」の付与である。



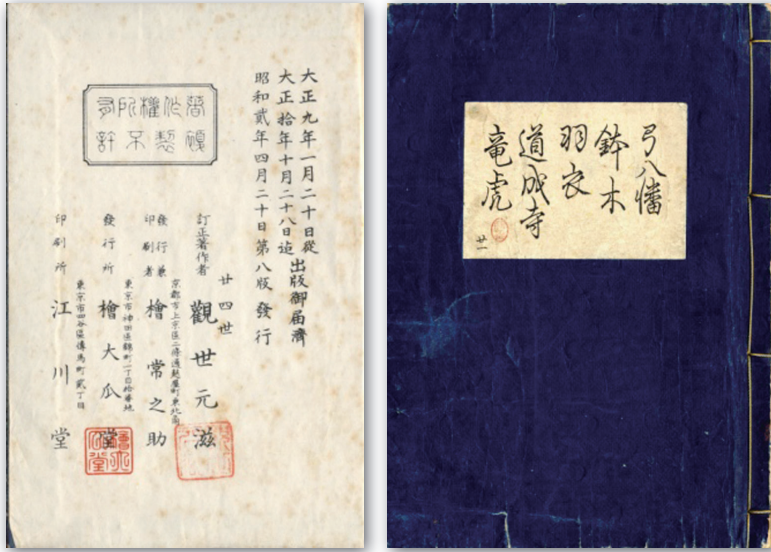
六、檜常之助（檜大瓜堂） 大正五年

一九歳の観世元滋による謡本。著者表記が「再訂正者 観世元滋」となる。印刷された直シは清廉による直シ入謡本の再版（明治四四年二月二十五日）にほぼ等しい。御願田満の願の読みが「くわん」から「ぐわん」に変化する程度で、筆致も等しい。



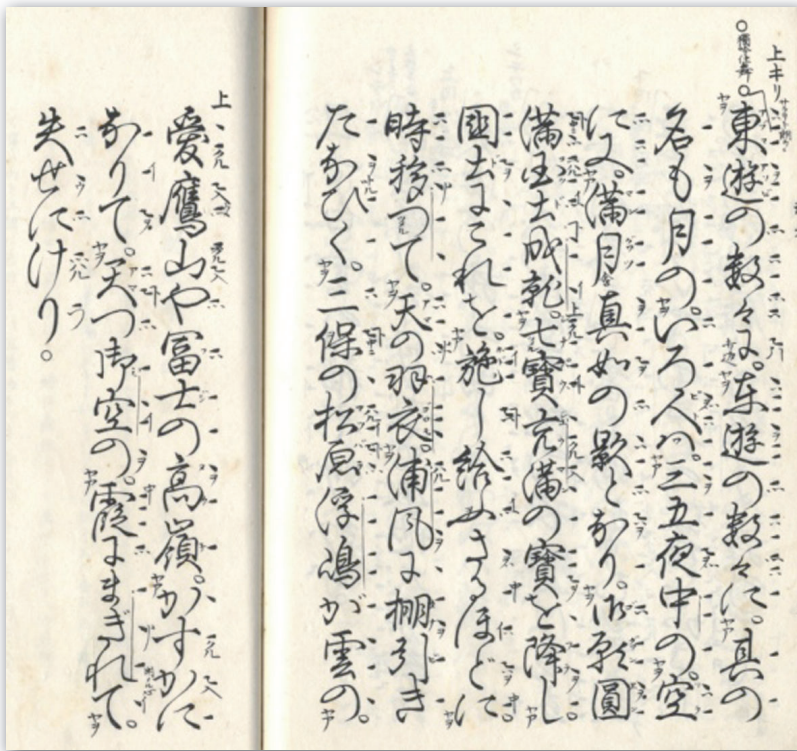
七. 檜常之助(檜大瓜堂) 大正九年〜一〇年 第八版(昭和二年)

大正版として知られる謡本。書体やレイアウトが全て変更され、曲の冒頭に解説と配役表が付属する。当時の人々にとっては驚くべき変化だったのではないだろうか。また、キリ冒頭の「東あそびのかずかず」の繰り返しが、踊り字で略記されずに言葉で記されている。初心者に対して親しみやすくなった。直シは「上」、「下」、「中」、「中サゲ」、「ハル」、「クル」、「ヲ」、「ヲ」、



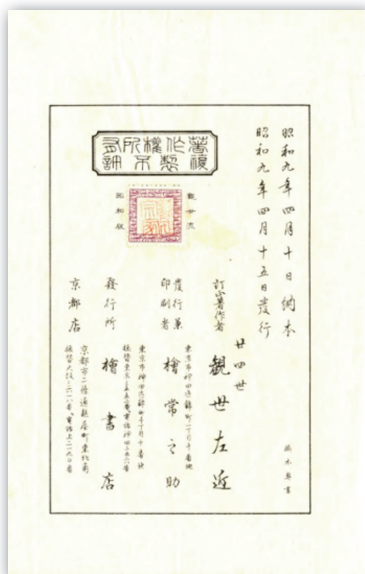
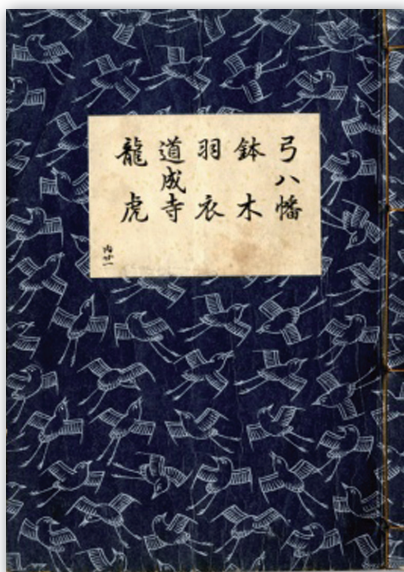
「入」、「ウ」、「イ」、「ア」、「含」、「ツメル」、「トル」、「打返」、「打上打返」、「ヤヲ」、「ヤア」、「ハシリ」、「引キ節」、「キリ」、「句切点」が印刷されている。檜書店の謡本において中と中ウキが初めて明確に区分され、「ヤヲ」と「ヤア」の半拍も弁別されている。他方「同」は無い。朱による書き込みは無い。

「訂正著作者廿四世観世元滋」という表記から、著者意識の芽生えがうかがえる。なお、本謡本の刊行に際して解説本の『大正改版節付凡例 観世流謡曲正本精解』も出版された。

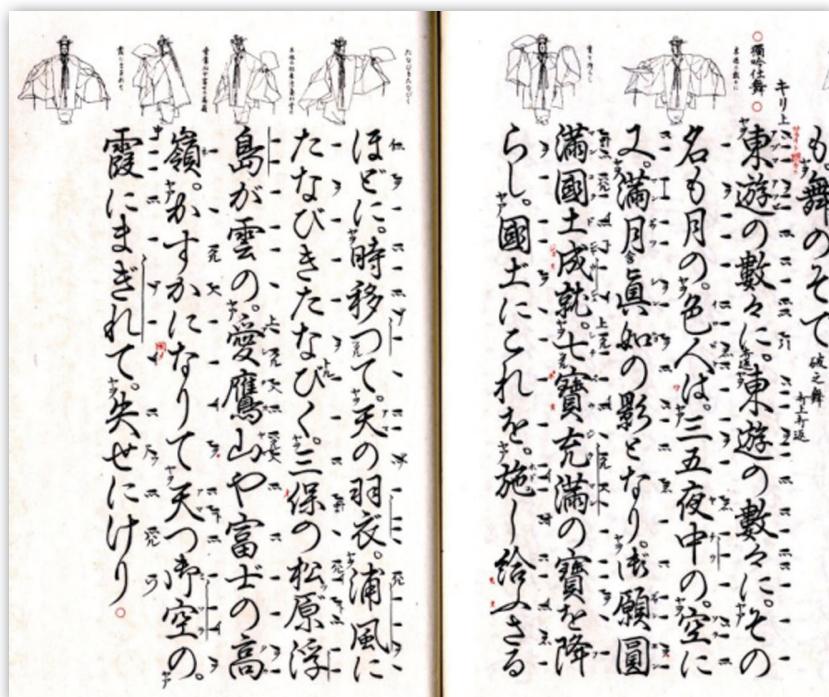


八、檜常之助（檜書店）、昭和九年 初版

大正版の出版後、それほど時を置かずに昭和版の出版が開始された。本文二色刷の美しい謡本で、新たに詳細な解説と演能素描が付けた。前付の解説は梗概、謡い方、能の異式、語釈、間狂言、小道具作り物装束附にまで及び、龍頭（頭書）は素描で役者の所作を示す。

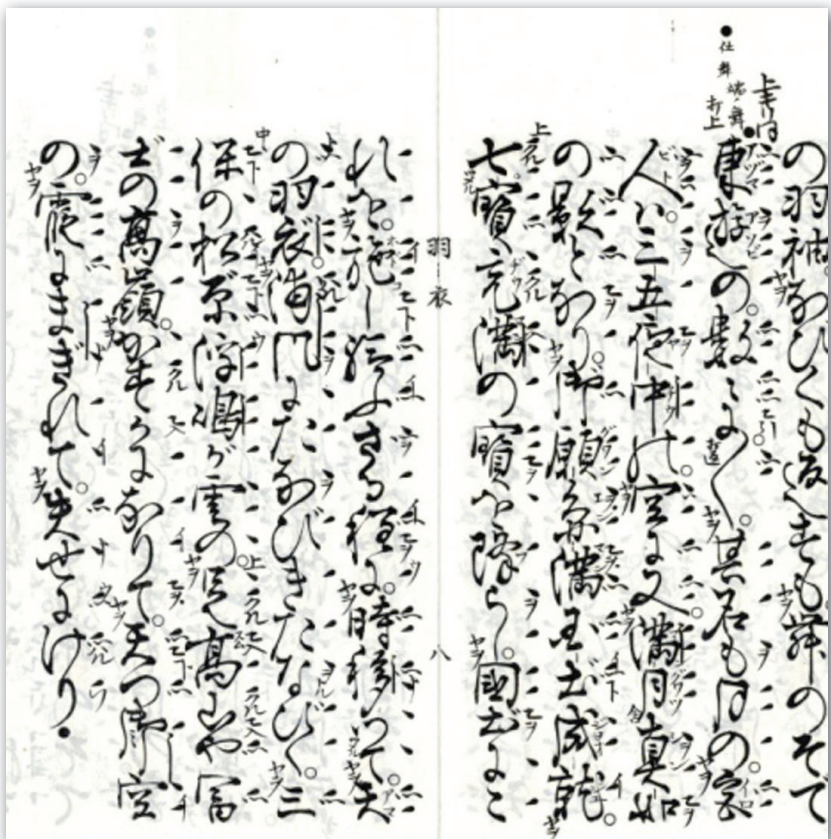
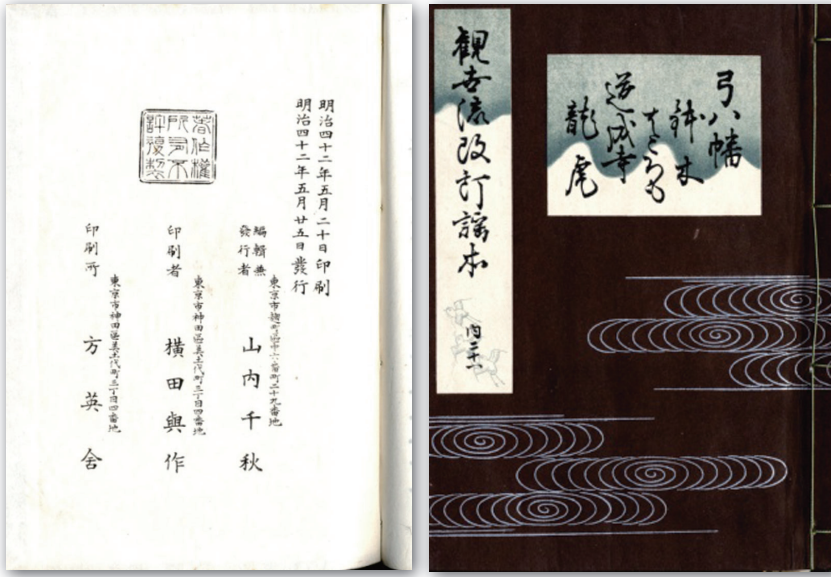


逆に節付の変更は少ない。「さるほどに」の引キ節が変更され、大正版で加えられた「中」が消去された程度であり、謡曲のコンテクトの充実に力が注がれる。併せて解説書の『昭和版節付凡例 観世流 謡曲製本解説』も出版されている。なお、著者表示は「訂正著作者 廿四世観世左近」。



九. 山内千秋「観世流改訂本」 明治四二年 初版

丸岡桂が中心になり、国文学者の井上頼園、謡曲家の観世清之と共に編集・出版した謡本。節付けの全面的な検討、国文学の泰斗による詞章の校訂、謡曲界の重鎮による直シ、低価格が評判になり、爆発的に普及した。革新的な試みは、その後の謡本の在り方を方向付けていった。



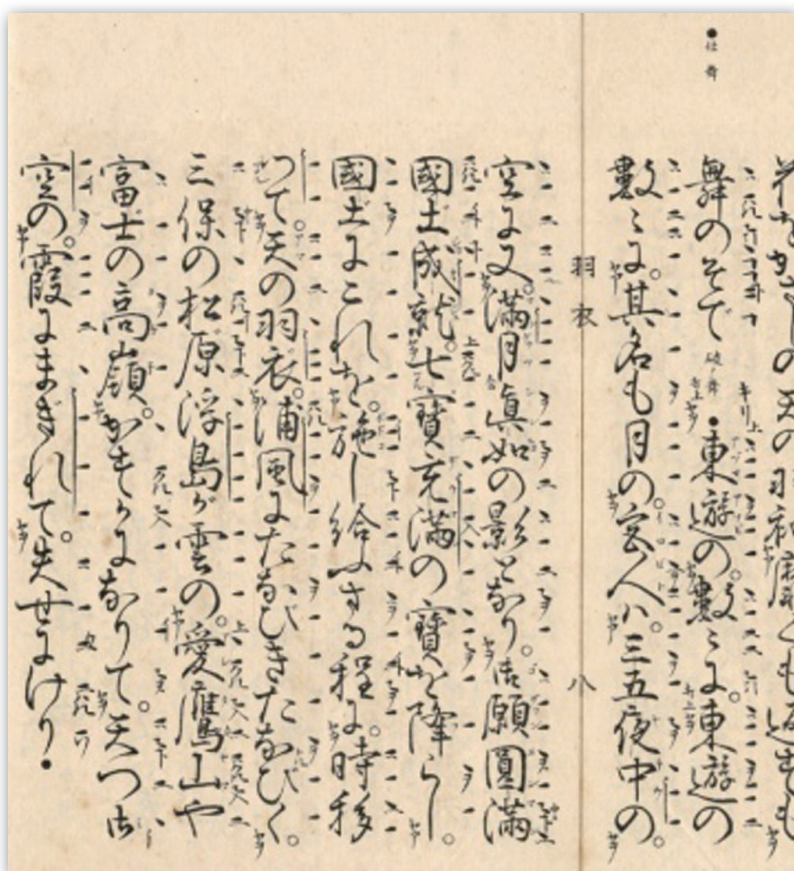
使用されている記号は、「同」、「上」、「下」、「中」、「ハル」、「クル」、「ヲ」、「マ」、「入」、「ウ」、「イ」、「ア」、「含」、「ツメル」、「トル」、「打返」、「打上」、「ヤヲ」、「ハシリ」、「引キ節」、「キリ」、「句切点」。上と上ウキの峻別は、当時としては画期的な試みである。なお、謡本の出版にあわせて大部な解説書である『観世流改訂謡本別巻』も出版された。また、奥付に丸岡等の名前がないのは、出版に際して生じた著作権を巡る係争に關係すると考えられる。

一〇．観世流改訂本刊行会 大正六年

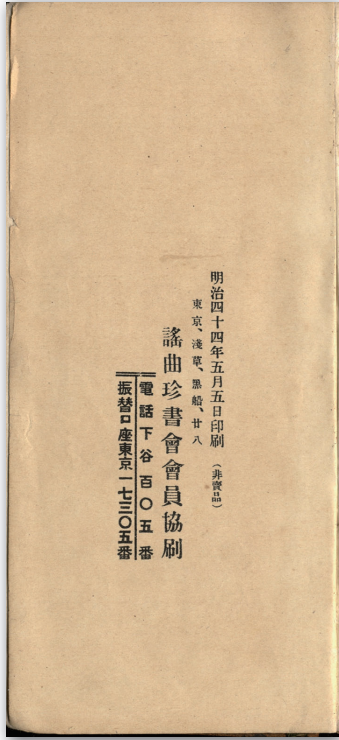
出版以来順調に版を重ねてきた観世流改訂謡本は、大正五年に大改定が行われた。まず譜面は、字体が読み易くなり、反復記号が廃止された。節付にも大きな変化が見られ、「御願円満」の「満」に「ヲ」に替えて「中二下」（中落シ）が記され、「国土成就」の「国」に「ハル」が記され、「七宝充満」の「充」の「クル」を削除、「時移つて」の「移」の「ア」を削除、「さる程に」と「浮島」の「ウ」を削除、



「霞にまぎれて 失せにけり」の「て」の「イ」を削除、「せ」の「ア」を削除という変更がなされた。拍子も同様でヤアの間が示され、「国土成就」の「成就」にハシリが付く。また、前付には、解題、小書、謡方梗概、辞解が付け加えられた（復興版別冊 観世流改訂本解説による）。



一一・『謡曲百番集』 謡曲珍書会 明治四四年

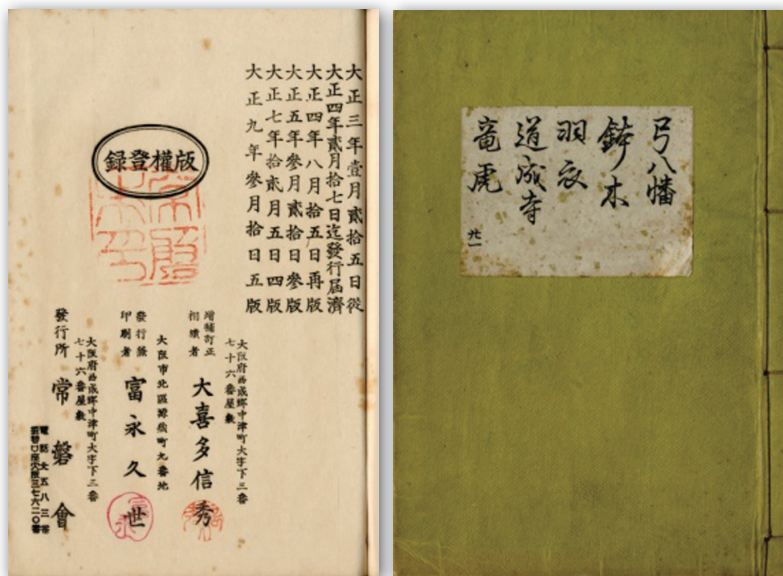


謡曲珍書会発行の謡本。出版事項の記述は少ない。『謡曲百番集』というタイトルと、「謡曲珍書会 會員協刷」、「東京、浅草、黒船、廿八」というおそらく版元の名称と住所だけである。表章等の先行研究を援用すると、梅若新太郎による梅若流の謡本と考えられる。直シは詳細で、「同」、「上」、「下」、「ハル」、「クル」、「ヲ」、「入」、「ウ」、「下ニウ」、「イ」、「ア」、「含」、「ツメル」、「トル」、「打上」、「打込」、「ヤヲ」、「ハシリ」、「引き節」、「キリ」、「句切点」が記されている。直シは明治三二〜三四年の檜書店発行の謡本に酷似する。関連を指摘することができる。

定価の記載はない。会員に限定配付されたと思われる。

一三、常磐会 大正三年 第五版 大正九年

大阪の大西鑑一郎が孫の大喜多信秀の名で出版した謡本。節付は近世京都の謡い方に特徴づけられ、古体を残す。出版地と、大正三年に初版、四年に再版、五年に第三版、七年に第四版、九年に第五版という記述から関西地域での一定の普及がうかがえる。直シは「同」、「上」、「下」、「ハル」、「クル」、「ヲ」、「イ」、「トル」、「打返」、「打上」、「打切」の「ウ」、「ハシリ」、「句切点」、「引キ節」、「キリ」が印刷されている。

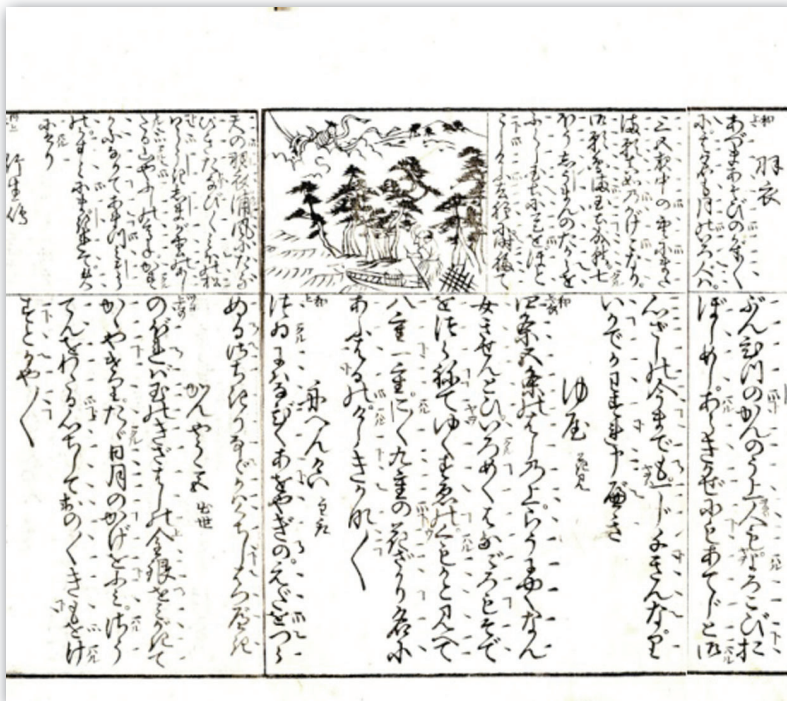
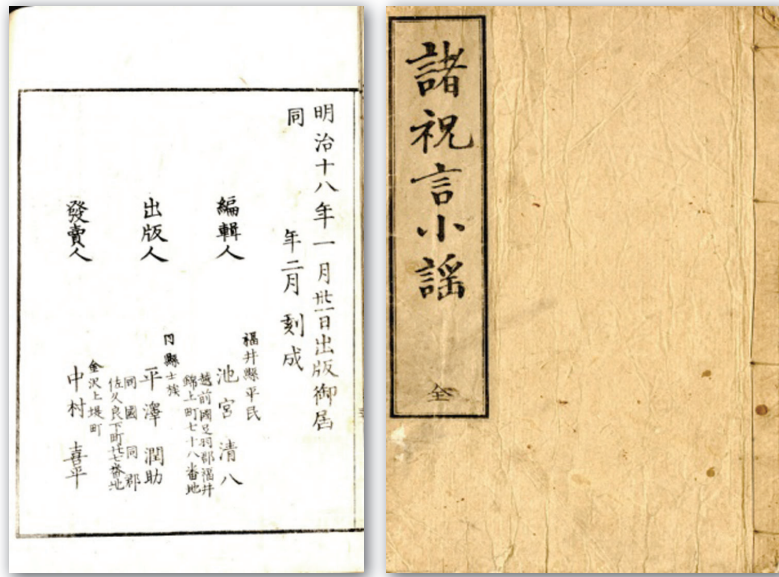


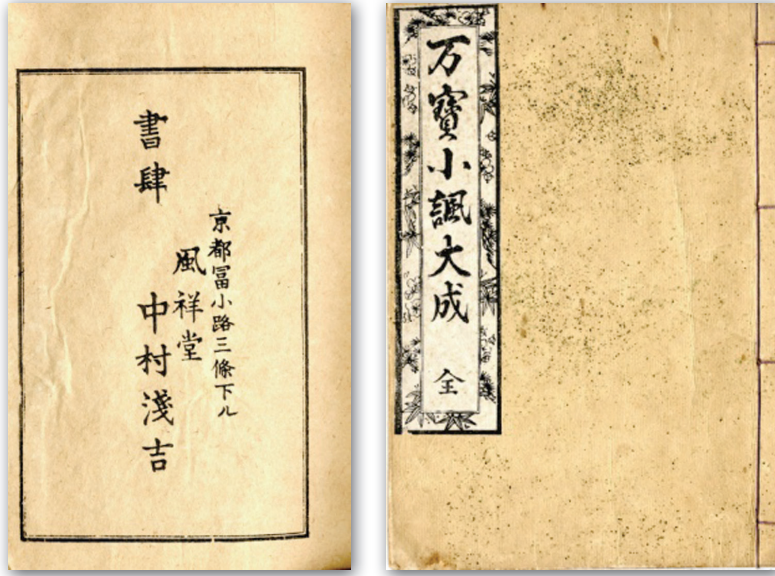
る。解説書の『謡曲秘伝書』と共に出版された。



一四、『諸祝言小謡 全』 平沢潤助、明治一八年。

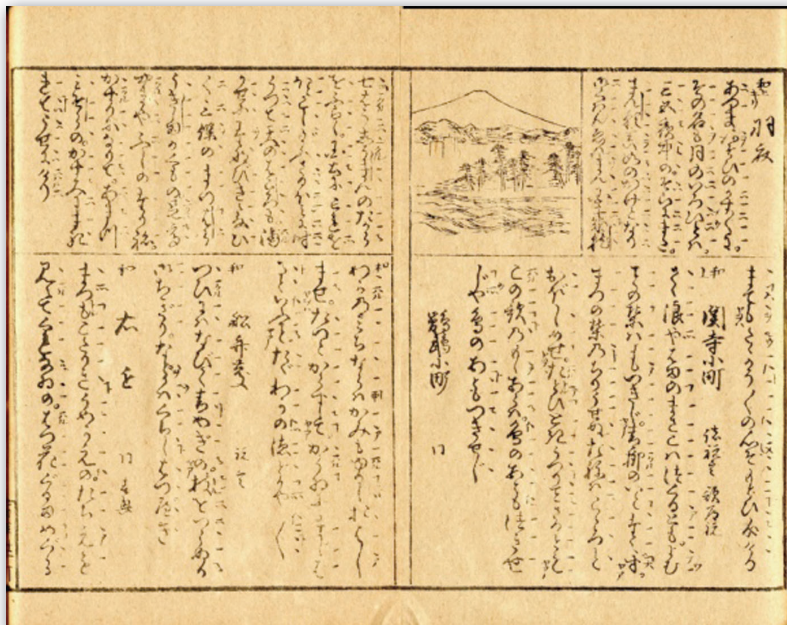
小謡集。福井の池宮清八編集による小謡集。同福井の平沢潤助が出版し、金沢の中村喜平が販売した。謡本出版の寡占化以前、日本各地で小謡集の出版が認められる。節付は「上」、「下」、「ハル」、「クル」、「ハシリ」、「引き節」、「句切点」のみだが、「トリ」が記されていて、句切れも区分されている。挿絵入りで、小舟に乗った白龍が、空を舞う天女に向って手を振っている。





一五 『万寶小謡大成 全』 中村浅吉(風祥堂) 発行年未記載

教典の出版で知られる京都の書肆の中村風祥堂による小謡集。刊行年は未記載だが、出版社の設立が明治十九年であり、近代になって印刷されたものである。直シは「上」、「下」、「ハル」、「クル」、「ヲ」、「ハシリ」、「引キ節」、「ウ」、「キリ」、「句切点」が使用されている。「かすみにまぎれて うせにけり」の「て」に付けられた記号は判別



不明。おそらく「イ」ではないだろうか。挿絵は松の生い茂った浜辺で、帆掛け船が二艘見える。背後の山は富士山に似る。

解説

明治期以降の謡本に顕著なのは、記譜の精緻化、注釈の充実、著作権意識の刷新である。

明治期中頃から観世流において詳細に謡い方を記譜する試みが始まり、これを引き継いで明治期末に丸岡桂、観世清之、井上頼罔が『観世流改訂謡本』を出版した。徹底した校訂と記譜法の見直しを試みた新本は謡曲家達の強い支持を受け、他社も追従し、謡曲界に変革をもたらした。

これに並行して語釈や背景知識も謡本に併載されるようになっていった。付属解説書の出版（『観世流改訂謡本別巻』、『大正改版節付凡例 観世流謡曲正本精解』等々）が試みられた謡本も散見される。明治期は出版に関する法律が整備されていく時期でもあった。奥付を辿ると、著作権法（明治三二年施行）が徐々に謡本出版界に浸透する様子を観察することができる。

参考文献

- 高橋葉子「『謡曲秘伝書』と常磐会謡本…残された岩井派の謡」『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第三〇号、二〇一八年。
- 表章『鴻山文庫本の研究 謡本の部』わんや書店、一九六三年。
- 『明治の能楽 一』倉田喜弘編著、日本芸術文化振興会、一九九四年。
- 『明治の能楽 二』倉田喜弘編著、日本芸術文化振興会、一九九五年。
- 『明治の能楽 三』倉田喜弘編著、日本芸術文化振興会、一九九六年。
- 『明治の能楽 四』倉田喜弘編著、日本芸術文化振興会、一九九七年。
- 『大正の能楽』倉田喜弘編著、日本芸術文化振興会、一九九八年。

※読みやすさを優先し、ヤケが強い謡本の本文には色調補正を施した。